

2004年9月28日(火)

13:30 - 17:00 グループ研究

研究テーマ:<カネ> コンソーシアム

参加者: 伊藤(立教大学)、小野(東邦大学)、坂下(法政大学)、星野(跡見学園女子大学)、宮岡(中央大学)、新見(中央大学) 敬称略

主な関心点

- 大学図書館間の協力の他、横のつながりにどのようなものがあるのか。
- 図書館間の協力により、どのようなことができるのか。
- 現在どんなコンソーシアムが存在し、どのような成果を上げているのか。
- コンソーシアムがもたらすメリットとは? またそれをどのように評価できるのか。

研究案

1. 京都大学間のコンソーシアム、PULC、SPARC JAPAN、OCLC、ICOLC、TRLN、ボストン図書館コンソーシアムなどから事例としてとり挙げ、成功する要因を検証してみる。また、課題や成功への障害となる要因についても考察する。

2. 仮想コンソーシアムを考案する

議論内容と作業

仮想コンソーシアムを考案するにあたり、まずは現実問題として参加者の図書館6館の不足しているものを洗い出した。実際上げられた内容は以下の通り。

お金(資料予算、製本にかかる費用)、書架・保存スペース、電子ジャーナルの種類、情報データベースの種類、人材、図書・資料(特に新規設立学部の資料など)、AV、マイクロリーダーやDBS、防犯カメラ等の機器備品の購入・保守、新しい発想や情報を交換する場、多言語のカataloger、博士論文の電子情報化など、

今後、これらを基に、自館で取組むべきことと、図書館間の協力により成果が上げられるものに分け、コンソーシアムとなりうるものを選ぶ。その後で、目的の策定や、理想とする運営形態等を考えてみる、といった案が出た。

感想: 本日の議論・作業の中で、自館内での協力や共通認識、コミュニケーションなどが充分でないことが指摘された。コンソーシアムを考える際、図書館間の協力を進めると同時に、自館内の協力も図ることが重要であると考えた。

